

「トモ君はごうしてはあちゃんの手を握らないの？
はあちゃんのこと、嫌いになったの？」

「ううん ちがうよ」

たまに、なお子ちゃんと手を握りたかったんだよ」

私は夕方になると野ばら稚園から帰ってきた隣のトモ君と一緒に、
グリム保育園へ孫のなお子ちゃんを迎えにゆきました。(二人とも五才)

それは一斉にかえるが鳴き出し、白サギが餌をとる雨の田んぼ道であり、
流れの速い用水路に、

白詰草が花首だけをどぶんとどぶんとナラわれている畔道であり、
切株だらけの広い刈田のてっぺんで、北風がドーンドーンと空砲を打ち鳴らし
大地がしびれるようにふるえあがる 真冬のうすべらい夕方でした。

トモ君はどんな時でも少し汗ばんだ手で、しっかりと私の手を握っていました。

この日トモ君は、まっすぐ前を向いたまま、ねじるようにして私から手をはなしました。
その硬い小さな手を、私は今でも忘れないであります。

トモ君の小さな恋と

その時私をよぎった小さな淋しさと――

私はこの日のトモ君の言葉を

お月様の絵の中に書いて、壁に貼りました。

真っ赤な夕日の中の かけがえのない思い出として――

今春

事務所で一人仕事をしていると、突然玄関から誰かが入って来ました。

ふつう来客は事務所から入って来るので“？”と思って振り返ると
まぶしいような背広姿の青年が立っていました。

“トモです。今から東京へ行きます。”と言ってその人は小さな包みを差し出しました。

“…トモっ”

“ハイ” 私はその人を見上げました。

彼は少し首をかしげながら、ニコニコしていました。



私はもう一度その人を見ました。

そして泣きそうになりました。

“そう… トモ君…”

“ハイ” とだけ彼は言いました。

しどろもどろになりながら

私は幼い日の彼の言葉を書いたお月様の絵を、
壁から外して言いました。

“就職のお祝いだよ おめでとうネ…”

彼は黙って、大きな両手でそれを受け取りました。

うれしそうに― 恥ずかしそうに―。

あの日の小さな淋しさが
成就したのです

